



京都薬科大学長

後藤 直正

従来の生涯学習とは一線を画す レーマンプログラムが誕生

薬剤師の生涯教育に風穴を開けるプログラムが、昨年、京都薬科大学に誕生した。我が国初の社会人を対象とした専門・認定薬剤師資格取得支援をうたう履修証明プログラム『Lehmannプログラム』（以下、レーマンプログラム）がそれだ。立ち上げを主導したのは、同大学長の後藤直正氏である。

「レーマンプログラムの『レーマン』は、明治時代に本学の源流である京都私立独逸学校の創立に尽力された方々が師事したルドルフ・レーマン先生にちなんで名づけられました。

本学を含む多くの大学で社会人向けの生涯学習プログラムが用意されていますが、レーマンプログラムは、従来のものとは一線を画しています」

大学創立に深い縁のある人物の名前を冠する、言わば『看板』プログラムは、どのようにして世に出たのか。

『レーマンプログラム』で 薬剤師の生涯教育に 風穴を開ける。

MY OPINION

—— 明日の薬剤師へ ——

取材／山中 修 文／及川 佐知枝 撮影／小林 正

「多くの大学で提供されている生涯学習プログラムを見わたしてみたいところ、ほとんどが、各疾患の専門家の医師をお招きし、薬剤師が集まって話を聞くという講義を並べているだけ。『果たして、これで良いのだろうか?』との疑問を抱かずにはいられませんでした。」

たとえば、大学1年生に4年生レベルの講義を聞かせてもチンプンカンプンなように、糖尿病にしろ精神疾患にしろ、専門分野のことをしっかりと理解するには基本的事項の修得、さらには最新の知識の蓄積が必要で、多くの薬剤師が話についていけない様子が容易に想像できたからです」

そこで、後藤氏のもとに薬剤師の生涯教育に真に役立つプログラムを構築するためのチームが結成され、基礎科学を基盤とした学びの機会を提供するとともに、症例報告書の作成能力を向上させて専門・認定薬剤師資格の取得をサポート、さらに将来のリーダーに求められる素養を身につけられるカリキュラムで構成されるレーマンプログラムがつけられたというわけだ（【資料】）。

単なる大学の授業の学び直しではなく 基礎科学の知識をどう生かすかを学ぶ

レーマンプログラムは、「京都薬科大学初のリカレント教育プログラム」と位置づけられるという。「リカレント（recurrent）」には「循環」、「繰り返し」といった意味があり、「リカレント教育」は、

社会人になってからも、学校などの教育機関に戻って学習し、再び社会へ出ていくことを生涯つづけられる教育システムを指す。

「リカレント教育は、『学び直し』と訳される場合がありますが、私はそれを、すでに大学で経験した学びを圧縮して提供することだとは考えていません。現場の薬剤師の皆さんは、一度は大学で基礎科学を勉強しており、同じ内容をもう一度、教えてもあまり意味はないでしょう。」

そうではなく、現場で遭遇した問題を解決すべく基礎科学をどう使うのかを身につけるのが、薬剤師におけるあるべきリカレント教育です。『あなたは大学で、こういうことを勉強した。その知見が、実は今、現場で抱えている問題を解決するのに、こんなふうになんか使えるんですよ』と気づいてもらう機会の創出がリカレント教育の大切な使命だと認識しています」

大学と臨床現場で働く薬剤師との 間にあるギャップを埋めたい

大学と臨床現場で働く薬剤師の間にあるギャップを埋め、両者の接点をつくりたい。レーマンプログラム導入の背景には、そんな後藤氏の思いもあったようだ。

「ギャップの一因は、薬学部教員における臨床経験の少なさ。本学を例にとっても実に8割程度の教員が、臨床経験ゼロで基礎研究だけをやってきてお



PROFILE

ごとう・なおまさ

1976年 京都薬科大学薬学部卒業
1978年 京都薬科大学大学院薬学研究科修士課程修了
京都薬科大学助手
1992年 京都薬科大学薬学部講師
1998年 京都薬科大学薬学部助教授
2004年 京都薬科大学薬学部教授

2011年 京都薬科大学副学長、理事
2013年 京都薬科大学常任理事
2016年 京都薬科大学学長

*この間、信州大学医学部及び東海大学医学部での研修、カルガリー大学（カナダ）客員研究員、大阪大学客員助教授を経験する

【資料】レマンプログラムの概要

■カリキュラム

*：2022年度以降開講予定

専門科目 (1コース選択)	症例報告書作成コース専門科目
	「症例報告書」とは、患者への薬物治療にかかわる中で、普段と異なるイベントに気づき、科学的根拠をもって事象を説明する文書である。この症例報告は、学会等の専門・認定薬剤師になるための要件にも求められている。本講義では、薬学的視点にもとづいた症例解析や症例報告書作成の基本的事項を学び、症例報告書を作成できる技能を学ぶ。
	研究計画・実践コース専門科目*
共通科目	「研究」とは、未知の事象を明らかにする活動である。しかしながら、曖昧な研究計画では、その研究成果が主張できない。また、すぐれた研究計画により実施された研究でも、その成果が伝わらなければ無意味である。本講義では、研究計画の基礎を理解し、適切な研究計画を立て、実践する技能を学ぶ。
	論文作成コース専門科目*
	「論文」とは、研究の成果や意義を多くの第三者に正確に伝える唯一の情報媒体である。研究成果が正しく評価されるためには、わかりやすい論文を執筆することが求められる。本講義では、論文作成の基礎を理解し、わかりやすい論文を執筆できる技能を学ぶ。
	薬学領域におけるリーダー養成基礎科目
	専門薬剤師・認定薬剤師など薬学領域のリーダーをめざすうえで必要となる「専門・認定薬剤師の意義」、「医療倫理・生命倫理」、「コーチング」、「リーダーシップ」等について学ぶ。
	医療を支える基礎薬学
	薬学で学ぶ基礎科目は医療現場と密接に関係し、薬剤師の職能のベースとなるものである。本講義では、実際の医療現場で活用できる化学、生物などの基礎科目のトピックスを物理化学的な観点も交え解説する。
	医療を支える応用薬学
	医療・薬学技術の進歩はめざましく、また医療ニーズの変化並びに多様化にともない、薬剤師は生涯学習を通じて研鑽を積むことが求められる。本講義では、卒後の最新医療の実践に対応するため、各疾患に対して薬学的視点でどうかかわるか臨床と基礎の連関を学ぶ。
	統計学
	医療研究をはじめ、医療政策及び医療現場での意思決定には十分な情報の蓄積とそれに対する統計処理が重要になる。特に、公衆衛生学や疫学などで汎用される医療統計学及び社会統計学は、医療研究や医療問題、健康問題などを評価・把握するうえで重要な学問である。本講義では、それらの活用の意義及び手法について学ぶ。
	医療と芸術
	薬剤師は、先端医療での多職種連携や医療現場での接遇など、他者との密接なかかわりを求められ、豊かな人間性が要求される。本講義では、医療にかかわる芸術の鑑賞を通して、他者を理解し許容する幅広い人間力を磨く。
	医療におけるAI・ICT活用
	これからの時代、医療現場にはさらにAIが導入される。またICTの発達で、医療情報の提供や共有のあり方も変化を迎えている。本講義では、AI及びICTの概要を理解し、新時代での指導的な医療人・薬剤師のあり方及びAIの利活用の仕方を学ぶ。

■少人数制教育

- ・5名につき1名の指導教員
- ・演習によるきめ細やかな指導

■芸術・ICT・リーダー育成科目

- ・専門科目だけでなくリーダーに求められる素養を身につける

■リーダーをめざす薬剤師コミュニティ

- ・受講生及び修了生が参加する「SNSコミュニティ」の設置
- ・修了後2年間は本学図書館及びデータベースが利用可能

■お問い合わせ先

〒607-8414 京都府京都市山科区御陵中内町5
京都薬科大学生涯教育センター 実務・生涯教育課
TEL：075-595-4677 / E-mail：jitsumu@mb.kyoto-phu.ac.jp

※履修証明プログラムとは、社会人等の学生以外の者を対象とした一定のまとまりのある学習プログラムのことを言う。目的・内容に応じ、総時間数60時間以上で設定され、プログラムの修了者には学校教育法にもとづく履修証明書が交付される。なお、本プログラムは、専門・認定薬剤師資格取得に必要な技能を身につけられるプログラムであり、本プログラムの受講によって専門・認定薬剤師資格が与えられるものではない

り、結果、臨床がわからない。一方、現場の薬剤師の方々も『大学の先生は難しい基礎研究ばかりしていて、自分たち現場の仕事に関心などないだろう』と、すれ違っていているわけです。

しかし、どちらも薬学部出身者で、接点を持ち互いに理解し合えば、思わぬ共通点の発見や気づきがあるはず。そもそも『患者さんのために』との思いは、両者とも同じなのですから」

教員が臨床を知らない現状の解決策として一瞬、教員が数ヵ月間、薬局や病院薬剤部で経験を積む機会

会をつくれればいいのではないかとの考えが頭をよぎったが、後藤氏の話を聞き、すぐに安直な発想であったと思いついた。

「薬局や病院に行けば、調剤や服薬指導など技術面の理解は進むでしょう。けれども、現場の薬剤師にもっとも求められるのは、患者さんの様子の把握と継続的な変化のフォロー。そうした本質的な部分はたかだか数ヵ月で体得できません。

ただ、そもそも教員が薬剤師の仕事ができるようになる必要もない。教員は、現場の薬剤師がステッ



ルドルフ・レマン氏

ブアップするために何を求めているのかを知り、教育に反映させるのが仕事。したがって、教員が現場の薬剤師として働けるようになる必要はありませんが、知る必要と交流する必要があるのです。その意味でも、大学教員と、現場の薬剤師から成る受講者たちとのコミュニケーションの場があるレーマンプログラムは、秀でた特徴を持つプログラムであると自負しています」

薬学教育が6年制になったときに 「人生は終わった」と覚悟する

レーマンプログラムを熱く語る様子から、後藤氏は薬剤師教育を長く手がけてきたのではないかと想像したが、なんと薬剤師経験はゼロで、一貫して基礎研究だけに従事してきた。

「正直に言います。薬学教育6年制導入が決定したとき、『もう自分の人生は終わった』と覚悟しました。基礎研究しか知らず、そのまま定年までずっとつづけるつもりだったのに、6年制導入によって右も左もわからない薬剤師教育にたずさわらなければならなくなったからです」

激しく落ち込んだ後藤氏だったが、教務部長職に就いてカリキュラムづくりを手がけたり、前学長の乾賢一氏と仕事をともにするにつれ、自分の落胆が誤りだったと悟る。

「乾先生は病院薬剤部で活躍され、薬剤師教育をよくこ存じでした。いろいろと教えていただく中で、

医学部が医師教育をするのが当然のように、薬学部が薬剤師教育をせずにどうするのだと、すっかり感化され、積極的に取り組んでいこうと180度の方転換を図りました」

その変わりようは、周囲から「君子は豹変するらしいで」と冷やかされるほどだったそう。

化学式の「亀の甲」を見ただけで 薬の働きがわかるのが薬剤師

だてに豹変したわけではない。後藤氏は、これらの薬剤師教育にどう取り組んでいくつもりなのかとの質問に鋭い視点を持って返してきた。

「6年制導入後、最初の10年をまったく未知のものをつくらなければならなかった第1ステージだったとすると、今は第2ステージに突入している。そこでは、基礎科学を臨床現場で生かせる力の養成に、より力点を置かなければならないと考えています。

6年制が始まって以降、『臨床教育』という言葉がよく使われるようになりました。確かに重要ではありますが、体を鍛えられていない人が野球をやろうとして格好良いユニフォームを着ても、良いバットを持っても、思うような結果が出せないように、基礎的な力がともなっていない薬剤師は、臨床現場に出ても良い仕事はできないでしょう。

薬剤師教育で『体を鍛える』に相当するのが基礎科学の学修です。まずは十分に体を鍛え、その後に臨床教育を受けるべき。そうしてこそ、基礎科学を

臨床現場で生かせる薬剤師になれるはずだ」

基礎科学の知識を臨床現場で生かす例を、後藤氏が興味深いエピソードとともに紹介してくれた。

「あるとき医師の方に、『薬剤師は化学式の『亀の甲』を見ただけで、薬の効能と副作用がわかるのですよね。我々は、それを教えてほしいと期待しているのです』と言われハッとしました。確かに、医学部教育において基礎科学の教育はかなり希薄です。対して、基礎科学に多くの時間を割いて教育をしているのは薬学部。薬剤師は基礎科学の知識をもってして医師の良きパートナーになれるのです」

アートに求められるような感性を磨き 患者一人ひとりに即した対応を

後藤氏の発言は、どれも胸に響くものばかり。薬局薬剤師に望むことを尋ねると「アートを学んではいい」と述べる。

「たとえば、薬局薬剤師の皆さんには、患者さんの前にして、その方を取り巻く環境や人柄によって、かける言葉を変えろといった感性を持っていたきたい。それは、真っ白なキャンパスに、自分で構図を考えて物を配置し、色を塗っていくような創造的な行為と同等と言えるでしょう」

未曾有のコロナ禍にあって、各薬局では、これまでにない対応を迫られているであろう。そうした未知の環境下では、磨かれた感性がよりいっそう力を発揮するに違いない。

後藤氏もまた、大学の学長として、これまでにない施策への取り組みを迫られたが、それについては「コロナに鍛えられました」と話す。

「コロナ禍を機に、学生が主体的に勉学に向き合う新しい教育システムをつくり、従来の教育方法を本学が変える意気込みを持っています。平時は物事を変えるのは難儀。ゆえに、危機の今こそがチャンスなのです」

生涯教育でインパクトあるプログラムを提示してくれた後藤氏が、大学教育のシステムをどう変えてくれるのか実に楽しみ。その暁には、再び彼のもとを訪ねよう。



レーマンプログラムの講義を行う後藤氏



レーマンプログラムでは、飛沫感染対策を講じてスモールグループディスカッションを行っている